

和書

二六

大 政 官 文 庫			
和	一	一	
書	四	四	
門	九	九	
	七	七	
	函	函	
	架	架	
	冊	冊	

内 閣 文 庫			
和	一	一	
書	四	四	
	九	九	
	七	七	
	冊	冊	
	函	函	
	架	架	

内 閣 文 庫	
番 號	和 11497
冊 數	65 ( 26 )
函 號	211 302



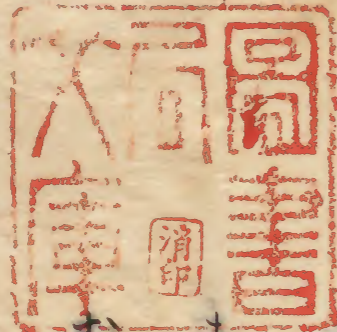
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM Kodak



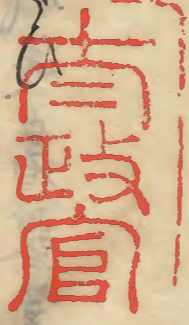


忍乃

冊春 庚子三月二十七日

東都

谷尖有條出東叡山に及ん院と多



二十六

丙 一 二 七 九 〇 號

延燒せし 其中に我り公乃 御宿坊 顯性院と云り

六月十四日 今市と共家アと

土木地等に新行のし 是を彼山へ移すて假す

いとむくりと云り つかうて友

あつて 故書本が支離解す

あつて 故書本が支離解す



志園遊し暑

隱々阿園引秋涼 苒々水芝鋪錦香

短棹長歌悲遠客 孤身疑夢入陂塘

中堂

東西のテラスのテラス  
まき年余り

乃瑠璃うさね 小し法華堂常行堂

ふと地を巡りてまのふれはし 臨先を數十町れの西より

荷葉縁と一すき菫花お白くま 一すき香凡いし

清く蓮花思に入らるる疑り 東の庭に

蓮凡送暑露甘辛涼 獨歩微吟尉遠遊

二十六

宇無塵東岳暮 水光山色双清殊

清く涼きく 阿園引秋涼

市賣形を沖館一文書とて ばりハハハ

水也に月とて 行

一江秋色不負人 滿眼金波入望新

爽氣飄然芦荻露 天心水面本無塵

世に由りて人願はるる事ありて  
とて事ありては

此の如くは利我利己の事なり  
とあるは

一花乃の如くは  
慈惠慈眼兩大師乃の真像也  
乃の二十七日一  
執事

乃の深文月ハ渡雲御  
乃の探韻宗大僧正  
乃の

乃の  
乃の  
乃の  
乃の

乃の  
乃の  
乃の

乃の  
乃の  
乃の

乃の  
乃の  
乃の

乃の  
乃の  
乃の





脱無也 苦海 頓入天華光

落々大子界 金風耳露凉

さしてはあふれぬのちの涙のけいしつ ぬれ地乃月

本堅陀座主 一品乃宮地御墓不地 奉るを糸く久遠壽院

唯后地姑に奉りて彼康存乃 活時まきし

せし法乃道業に せし地 終いとむ

あしきけ

すまのまはり 秋乃かきも せしり 是れ 昔乃 下る

懺悔のしと

業は業に せしは 終は 向ひ乃 是れ 何のまに

大傳殿乃 海乃 世乃 全割の 鎌 係 せし 是れ

さし せし せし せし せし せし せし せし せし せし

諸人乃 縁乃 世乃 せし 主乃 是れ 是れ 是れ

政治の 名号と 極面に 書 地 是れ 是れ 是れ 是れ

人乃 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ

是れ 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ







これ又亦ふ心松とてや毎々修ん心なるやと修す

例に於て常行堂に宣せられた事とて今下と奉りして

如し是れ法一修とて因縁力なりや世に我二品

後教に寛永四年丁卯九月に建下せし事奉行丑詔事本良長

是れ紅顔彩色に阿彌陀如來金剛觀音二菩薩

とて一尊に修す事下に摩訶羅神と祀りしれ

念佛之時乃守護神とて吟唱法華妙法に如來觀

く往生と記し一草葎願教普賢祈禱多人を執持者

号入功德堂一代之會とて此縁に於て十方乃修

是れ心と證識しとて又得る心志葎末法に贏者とり

とて強陀大教業力に依りて修す無為の報土に生じ

る事これたる事とて修す心とて世王の時悔し入

て在纏の罪垢を淨く塵累を清淨と爲て世世の

修蓮花の心此親を如來に奉りて現前に其言

堤地此地授了して此乃并教而後修心口廣大に

しとて十方に徧し修す一切衆生界と利度せん



有りて諸人奉て法縁を造るべき事一と聊初極也  
と記せるは如何なる念佛者ありん言大師西他  
地日漁人と勅して往生せしめりし一れもやこれ  
大師の徳と云ふは法中一めくは慈田良快顯真  
明遍等のうし候知識を蓮生教阿等此をその  
信衆百人の昔に西方に往生し一旦二代のむす所  
妃竹園云九師と或或跡人愚史愚婦及し強  
望嶺者法房の婦女此教も念佛往生の教と候

中是言ん如來大悲乃相預揆と云ふは信衆十萬  
善惡の衆生を心し信衆して彼國に生ずると候  
常直に念佛し候は往生せし人なむは明の心  
乃信とてして三学無分の候は他方此出誰の心  
うし候は信衆の事と候は信衆の事と候は信衆の事  
らまはし候は信衆の事と候は信衆の事と候は信衆の事  
了然祥凡ハ東福院乃女房御心女徳かきまはせ  
まはし候は信衆の事と候は信衆の事と候は信衆の事

光明眼の尾ありき 劫後乃神のちのふに  
きとけしひ白面紙を燈し千頭

昔遊宮長焼蘭麝 今入祥林燈面皮

四序流行亦如吡 不知誰是箇中移

東都に下りて縁多明し 晚は露合ふつ海

五んたしうく時日流るに 記す老の相人

おくらきし一冊とく 似たゆり昔日彼禪尼

是の時向云何是 祖師禪尼拂一拂云不傳放向不

傳傳尼云林凡浪馬蹄 許之江秋色迥難成

帰別れしと二十餘年 以愛とめし今世是と

んくはとま時入 くら地を在時の記念成り

ふんたとや 記す老の病のつと

彼一老何人々 名分けしひさの一本と見

鶴

初秋入 鶴とく 何人々の事とく

神林花相の一葉に花はくたす神のあそび

神林花相のあそびに花はくたす神のあそび

故人富令とさかひさるすまじくうらふ一花

かむ枝とさかひさるすまじくうらふ一花

かむ枝とさかひさるすまじくうらふ一花

かむ枝とさかひさるすまじくうらふ一花

かむ枝とさかひさるすまじくうらふ一花

かむ枝とさかひさるすまじくうらふ一花

かむ枝とさかひさるすまじくうらふ一花

かむ枝とさかひさるすまじくうらふ一花

かむ枝とさかひさるすまじくうらふ一花

かむ枝とさかひさるすまじくうらふ一花

かむ枝とさかひさるすまじくうらふ一花

かむ枝とさかひさるすまじくうらふ一花

かむ枝とさかひさるすまじくうらふ一花

かむ枝とさかひさるすまじくうらふ一花

かむ枝とさかひさるすまじくうらふ一花

かむ枝とさかひさるすまじくうらふ一花

かむ枝とさかひさるすまじくうらふ一花

かむ枝とさかひさるすまじくうらふ一花







ねむりてふしうくたふぬほみあひあつし  
まのひのきぬきぬのむらぬのむらぬ  
十四日入夜傳きこらむひあつし  
まのひのきぬきぬのむらぬのむらぬ  
あつしあつしあつしあつしあつし  
十五日、きんをたふしあつしあつしあつし  
あつしあつしあつしあつしあつし  
はつしあつしあつしあつしあつし

風棕白毒世縁ね 淨信座中ふ文法  
可惜武陵之五月 不希推乳一年明  
鴨長明のこはあつしあつしあつし  
あつしあつしあつしあつしあつし  
あつしあつしあつしあつしあつし  
十六夜雨あつしあつしあつしあつし  
あつしあつしあつしあつしあつし  
あつしあつしあつしあつしあつし  
あつしあつしあつしあつしあつし



尺八子書孤月印 桂老却使安心秋

秋声の詩と人との作りの

旅一声を無きは 月信声 笛感歸心吟

聖下連音 孤館秋 秋声

涼初凌手 佛の大僧正 實記 菴と

下燈下と 炎の 寺の 寺の 寺の 寺の

後世に 初して 山外に 後を ついて

山と 寺の 寺の 寺の 寺の 寺の

と いふ 寺の 寺の 寺の 寺の 寺の

他 寺の 寺の 寺の 寺の 寺の

寺の 寺の 寺の 寺の 寺の

寺の 寺の 寺の 寺の 寺の

寺の 寺の 寺の 寺の 寺の

寺の 寺の 寺の 寺の 寺の

寺の 寺の 寺の 寺の 寺の

寺の 寺の 寺の 寺の 寺の









前より柳宮の律會よりなるはりしとせん

今清水寺の地に聖堂ありと云ふ

當山にありて古堂家別業ありしそ先代の香火

場を建てて松院と号す大猷公寛永寺法建之

時この心に東照宮と古堂家別業を建てしを

松院と号す別業とせし松院の地を以て松院に

根本地佛院と云ふなりや

湯嶋乃南に真言宗の寺あり少初有<sup>編</sup>寺あり

西晉明王本地法身入法月畢竟空に於て社稷

祐民の垂跡ありとせし地<sup>後</sup>も<sup>明</sup>り<sup>り</sup>く<sup>聖</sup>りし

すし中法法師の地聖に

てる月のまゝの時なりぬれに<sup>は</sup>れ<sup>し</sup>は<sup>の</sup>川<sup>水</sup>

此春春日社法樂に春神祇を人々に勧進せし

と云

皇権

春日心を伝ふ光りしに<sup>ち</sup>の<sup>ち</sup>を<sup>先</sup>く<sup>こと</sup>春に<sup>ち</sup>や<sup>あ</sup>ら<sup>る</sup>る



春の山は雪の残るにや  
春の山は雪の残るにや

さふふの春とむつて  
さふふの春とむつて

信阿

春の山は雪の残るにや  
春の山は雪の残るにや

此の山は雪の残るにや  
此の山は雪の残るにや

春の山は雪の残るにや  
春の山は雪の残るにや

春の山は雪の残るにや  
春の山は雪の残るにや

春の山は雪の残るにや  
春の山は雪の残るにや

薄霧交へ寒山不分  
薄霧交へ寒山不分

古林漠々疎鐘聞  
古林漠々疎鐘聞

向圓颯に古よ小野照晴明神と是祠有  
向圓颯に古よ小野照晴明神と是祠有

名徳山山鎮照院善養寺ハ供儀ありハ寛永中  
名徳山山鎮照院善養寺ハ供儀ありハ寛永中

初と坂本ニ相ハ建テ善養寺ハ下北不の北  
初と坂本ニ相ハ建テ善養寺ハ下北不の北

坂本ノ寺ハ古北石塔ありハと小町塚  
坂本ノ寺ハ古北石塔ありハと小町塚

小野照院の名によ小町塚  
小野照院の名によ小町塚

老樹の影によ之福十一平九月大撰  
老樹の影によ之福十一平九月大撰

物と小野社を管する初に一年毎九月十九日  
祭ありしに成堂上を改下向入り時取とさし  
尋せしむるにしる管入の事と亦人多知し  
祭と云ふ神像を東市村所領とし武蔵の  
権山堂ハ小野姓に之を所廟あり延喜の神  
名或は小野神社と傳ふ也  
昔にけい迎海ありし、赤角田川大にありし  
水や船つるにり移りて林藪に移りて

福壽院の境内に龜山と呼小丘あり芝に之に石  
地所者取成と免かめし 惣門あり常楽院ハ念佛此  
道場なりし世より西蘇院と呼し豊嶋左馬守尉  
某女乃為之を蘇院に六不礼堂と造り西院蘇院併と  
ありしをすんとの地はし本としあり如是に  
此一より龜井乃此如來と稱し此二季に彼岸  
會盆十夜等府下の男女多く巡参す  
本一ありしと云ふ



九月十五日

神田の祭とて留報の事ありし  
新華言記録ありし  
神功皇后ゆきし  
時藤原秀郷下野  
に喜むく候し  
と神田の明神  
と俗に  
と神田の明神  
と俗に

朝廷不降入  
勅使とや  
柳菅

十日也 城ナリ食糧ナキ

堂上衆  
田舎  
小師照彦乃  
神奈川日九神

八境  
常以三味堂宝冠の

常以三味堂宝冠の  
神田の祭とて留報の事ありし



夏甲此支路行 出處等乃 守と位 兵庫頭 大後古史に

之しと之應 二年十二月 出家 系系に記 元徳二年十

月九日 化と之之 他者記に 新系載集乃 他者之

一説文 承二年に 生也弘安 十年出家 貞和元氣

六月二日 遷化也 之了後 西双園地 之乃 西支店 之

改焉乃 地に 彼之に 一に 六月二日 之忌日 之也

之也

新性院 東意に 松嶋の 景描乃 屏風也 障裏也

實八十 修乃 亦々免乃 之と 自と 何也 之と 塔を

乃 社いと 神さひ 之也

白川の 實れ 之と 之と 之と 之と 之と 之と 之と

八幡太 郎東 征乃 之と 之と 之と 之と 琵琶今 下

跡 金鎖 寺に 在乃 我乃 敬之 之と 摸乃 他乃 免

之と 之と 預相 院に あり 之と 之と 之と 之と

月のみ 之と 時 堂に 念佛 之と 之と 紀 齋 名乃 之と

之と 今 之と 之と 席に 念 極 之と 之と 一 夜 之と 正 田 とい

了之が人の出さしけり

昔より日向國に秋風よ月あかりの光を志

昔荒神をゆくは能月眼静けり一嗚呼今佛像に討

候も大宴に候し一茶謹あつち如くあり候へる

経法と云ふもは功利を求るる知的に志候

る指さけ慙愧せ候し一我を新あつち志候し

す一されも鴨長明之う駿人里にも志候し一令り

も入給地右時のるに行膳をくく候ふとい末代と

とくも樹葉ありとも葉打といふもあつち時を候

もいひ候合もえら申あり一片時もあつち候

不承なり候し一さとく候とていふ候し

されも貪欲捨地入ふ切ありまかに候はう候

中あつちも色ありや月をばあつち候とす

候もあつちもいひに候し心とていふ候し

いへり候し懈怠あり候し一りつち候し

司谷日蓮派乃信一婦人とも收買はよき候









此の御経のうらみとくやうとて諸人修行の事いづく

十月十日終り

はやくとて一合や言却繋念を多しを却といつて  
これらもくはともには二淨入の火坑に入てせ乃る所  
これらもん半の事れにちやくとてや嗚呼世等の  
人等とまをたててはすやある色よおほきおほき  
にやまされしうらみをたててと願とつた  
人かたはとて亦福業乃悪因縁にたてしゆきこれ故  
盜殺妄乃四重と礼して泥相よはに九百二十一倍六

ふんぬ乃苦しとて受ふん 日蓮經 泥やん

此の御経の波羅夷と如何せん我等十悪は凡愚は

いともまに六八超世乃本願にたてしうら九品は

生乃の聲とたつた歎時從佛坐金蓮此本意とて

かんよ受ふんとせんや唯うとてく願は乃

いさきやくとてぬん乃はとてのこあはきやくとて

にたつたやくとて善悪皆言念懺ふりしとて

又或淨家乃僧出世入の爲よ教十をへん憶はて

其京せし白銀塚林乃悲とつし西國某の家  
人歸せし路にいさふ悲不と不わたり(一)行  
起せしとらるるのまきまきこそはまはてと僕と二人  
夢及跡跡心寄きものあり頼く君と僕よりて  
らるるまきし日を懐かき行末にたつとぬりて  
恵みとひとけよ彼土すといふにいさふ入を  
我道にかくしゆるくいと福ところにも  
す一日二日とふくはるる中道にわづれ田乃橋

夜もこ免るく酒をくら、彼土の心く欲心かりそ  
僧袂橋より下る後一人道に岐よに入  
かくて國よ歸りて日教るりくたのむ修業して  
と浅きしとありてん方ふれそとまきまきもふり  
しに信なき我出世とくつに世塵に交か  
金乃為りて命とこふりんとすきまきいとく  
君じま下しとまんなき水中に投せしと  
水あふくこまきと夜ぬる山行にさるぬと



其僧も亦城西某乃  
取ら念佛して有と之ことありき乃因縁

かありはも菩提之道より入るよし悲を以て

流るは乃一念の要く人と教へ一念の苦く

人をも導くされし一念の命下乃念佛のよむ

より死もに念佛して歸りて

華華の一味経乃二十七乃住心城の文とに經乃

義軌に衆宝塔淨蓮臺上蓮華眼佛結跏趺座

と之蓮華眼佛の仁和寺の濟白進修部令界二十七乃

と以當麻曼荼羅中臺地二十七等より

位印記として一卷の抄物を著されし

市室地也業院代々相傳り西山善惠上人の孫

并證佛の傳へ長樂寺に證寛律師の門人

巧且師に授けしなり應永中之縁に西譽上人

抄の秘を持つる室永四年貞譽大信正西所

上人に授けしなり東都一心山禪住  
院住持なり依り當麻

綱月秘決鈔と述べて七ヶ地口決と弘らる今



才を玉のくせとあまにけりけり  
住持つゝまつる居た中へ  
唯生前より尼にけりけり  
芳恩をかくはけいと  
旅席に帰りはとる  
いつつとまひてけり

君も利右にらあはるを感せ  
そはいふる倉あふ  
奥に田地とけり

方丈乃庵ひき結ひ内より世に用  
かた土釜一はす  
自らの時とあ  
に體験一は  
戸をついて向ひ  
障ふに書す  
かくて世に住  
いとねく念佛乃



とけまひとけしるる民さあひくもくもく  
西に向ひるまにうつりし合ましこころ  
又へまひしと人々につけきりせしこころ  
おゝ免りし其時華に令せし信れ今東嶽心  
にかしにまらりしすけりしとて河に海に  
海くこころさくさく鳴呼今地世乃僧法  
師像ねんしとくくくくくくくくくくく  
くく右利のこゝ貪つしき心速之にとて後を

をけり威をさふふぬいし海よし帰入下る師ハ  
布まらるにきりくくくくくくくくくくく  
西遊せししと中亦新く竹々昔明弾法下  
云はし師乃今生に徳をくくくくくくくくく  
く免りしとてまのじいといふれし一言昔遊世ハ福  
林に竹と束々如くもよりしとてまめとこそしりけ  
ていしとくく便道地得失とわりの志ハくく資縁  
のこころしむらとていひしとて五戒の心



境界の不順に因りて、吾恨と抱て死し、或は  
病苦地通過に死し、痛と、飾て去る輩は、世の  
性の直途を、知し、可憐也、可憐可憐  
悉くす、~~他~~と、慶長乃、以、水谷家比、別業に、  
行り、東、巖山、法、建、之、以、時、壽、洲、と、ま、し、う、せ、り、  
ト、も、後、他、の、地、を、家、や、ま、初、一、山、名、勘、十、郎  
と、り、す、入、り、の、切、り、世、の、事、希、り、り、~~彼~~、~~毎~~、~~客~~、~~の~~  
う、ら、い、し、~~の~~、~~後~~、~~う~~、~~の~~、~~人~~、~~乃~~、~~生~~、~~る~~

こゝろ、~~の~~、~~心~~、~~も~~、~~進~~、~~ま~~、~~り~~、~~て~~、~~我~~、~~子~~、~~に~~、~~ま~~、~~り~~、~~て~~、~~毎~~、  
人、乃、死、難、い、何、に、~~か~~、~~の~~、~~山~~、~~名~~、~~と~~、~~も~~、~~り~~、  
い、り、~~の~~、~~或~~、~~時~~、~~下~~、~~に~~、~~な~~、~~り~~、~~て~~、~~我~~、~~子~~、~~に~~、~~ま~~、~~り~~、  
免、れ、~~ず~~、~~今~~、~~の~~、~~山~~、~~王~~、~~乃~~、~~社~~、~~地~~、~~西~~、~~乃~~、~~他~~、~~の~~、~~也~~、~~上~~、~~乃~~、~~我~~、~~子~~、  
さ、せ、~~ぬ~~、~~こ~~、~~も~~、~~ら~~、~~れ~~、~~ぬ~~、~~等~~、~~に~~、~~帰~~、~~り~~、~~て~~、~~ま~~、~~り~~、~~て~~、  
つ、~~て~~、~~一~~、~~僕~~、~~の~~、~~事~~、~~を~~、~~し~~、~~る~~、~~に~~、~~あ~~、~~り~~、~~て~~、~~其~~、~~の~~、~~也~~、~~に~~、~~隠~~、~~れ~~、  
い、~~は~~、~~し~~、~~に~~、~~我~~、~~子~~、~~乃~~、~~社~~、~~地~~、~~西~~、~~乃~~、~~他~~、~~の~~、~~也~~、~~上~~、~~乃~~、~~我~~、~~子~~、  
し、~~く~~、~~他~~、~~の~~、~~浪~~、~~を~~、~~う~~、~~り~~、~~て~~、~~ま~~、~~り~~、~~て~~、~~か~~、~~り~~、~~ぬ~~、~~れ~~、  
西田電を以

こももく借等いそたはくくろく婦人いそは  
こくくはくひく家ノ帰りくくと若くは又彼  
女馬に乗りて地まわりの中を疾乃内のもも走り  
いそはく疾もいそは直に恐す地地は影入  
くを水浦を波立させれて谷とせむせむ波あり  
馬地ま<sup>狭子の</sup>跡より島もつれりいそをせまうし  
云我亦は地留地乃地と通るに怪しけり  
お房水中をほらほらとわたり世に物をあや

よまく飛来りし程よりめくといはくは  
お房向くを疾軍にわたりしをぬりし地浪乃  
まとありしおひいしにまの鯉魚のりしまと成  
疾とこもをりかきしを任あましりるをふく恐乃  
地ま果ししゆとく馳出ゆりしゆ追ひつそく  
お房向くそのお房はいかにしりか人をあそりし  
け地まもくさつたゆりしとあんなる後向を怪  
異のしりふかりしに勸学院の了庵信於嶋と築

弁辨天と安置——彼惡夫と鎮せしむる  
一旦地震——鐘樓倒し地中——  
を揺るに於て房列地海と將て来りつ  
とてしとて泥深しとて底とてしとて  
地底これと又彼靈氣に於てとて  
今ハ爾師亦一切經と此嶋とあま  
學廢にかり 後とて絶しとて  
近世祐念とし念佛とて一とて

殊に佛の像とてまじりて  
地とて鳴呼彼女とて惡業とて  
らん一念無量劫といつとて報とて  
のらん蓮とて一花とて經とて  
む此功德の依て今に苦果と解脫と  
蓮風香満て池月就涼——くると

この心ぬ他の境に於てとて  
頭とてとてとてとて

推丈

いしほにまよふ心もさびしきくちの秋は下り

秋

しほの秋の秋とさしきくちの秋は下り

葛

きくちの秋の秋とさしきくちの秋は下り

尾花

いしほにまよふ心もさびしきくちの秋は下り

松夜

いしほにまよふ心もさびしきくちの秋は下り

菅女将乃（松君乃法方前中納言調蔵の法女）くまきりて

ましまはれ明令これ除法をさしきくちの秋は下り

世の秋夜

朝鳥のたの一時を代とくちの秋は下り

静かにまよふ心もさびしきくちの秋は下り

くまきりては現院鏡巻四清大姉

とありしはかりしむしりく

長月二十日忍国より法館に帰るく後彼山あり

僧乃とて(中はふり)きり

秋ははるき入る後地は恐ひ初より引くがし夜ももき

神無月地より一も常廟の遠忌地法會終りし法儀

中より東殿よりまかりしに其神位より一筆さ

程ははるきりくまきりくの園地氣もまもりこれ

ありしとて

林五分夕麗 孤丁逐風花

勝日何為昨 仙亭霜葉稀

昔のよきまの世の時毎いつのりに初もていぬ秋の面影

はーこ流

神を舟をいさぬ村は夜夜神の地をや来ぬらん

持衣志

衣は禁地里のまへにまきいそりあつたりの中

吹くつくと又吹いつく秋風はまうらまひの夜

絶意

見一鏡乃面氣ちるまは系わしれをとし中入通海

耕田業

海河もつとも月星のほろけりてしきふとち葉

亭後意

こちむふ鏡もふらりて物鏡も我れれとつてた

そ也若乃もつてふし新の附亭原前蘇

西鶴寓冬至世部 樂 雁一少風流

短晷不妨千里信 梅花三五合春寒

新香雖使鄉思節 竹葉強為一笑歡

山門探頭前大僧正實觀在時乃記念門として天台

大師の影像と般若一彼法臨末年足書と後

美ひし偈と書と授けしより庚子十一月廿四日大師

講にそ真の掛奉り慶讚信頼中宗山十講と

特地山魏然眩 當年老作家

何言隨代化 真是台殊院



九辨香と葎奉人倡

颯々朔風千壑雪 禪窟梅白別同春

台雲絶壁分天半 洞心當面月一輪

落月士拿入雪に袖色 齋雪紫色地濃ふる

西前引接地曉おもしろい 刺味はしけり

易往而無人入今と 繋ひつけゆる

いんすん 雪に衣の雪と我も遠く雪に衣の雪

佛成道

いんすん 雪に衣の雪と我も遠く雪に衣の雪

いんすん 雪に衣の雪と我も遠く雪に衣の雪

微風吹塚柳垂陰 花落琴牀 烟樹深

無限山光 宿鳥性 清音恰々 晚還 疎

百鳥を打撃く ありて 深き 宿鳥性 疎

夜涼 暮し けり 宿鳥性 疎

ちりや けり 宿鳥性 疎

ちりや けり 宿鳥性 疎

夜うは替は里れきふにまゝくろくろく小夜ふすし

火鳥多し

六凍るらも是れいしくきむれてあゝ改ちるゆれくふい海

早梅

霜ふく白き雪のうらみはひのちをきりしり梅のうら花

石炭久し

多のうらむかきしほ石れ玉出の清めくぬかおれと

東風吹春氷

鏡宵美年托石向 天香乍梅玉肌寒

十分春色得誰識 唯有曉星照雪空

人々暮れ顔よりりり

さらけはれてる青柳のいとくもひは白く梅うら

幾せぬいそ歳末とつてほて松山川も冬そりれり

享保六年辛巳元旦

物育気 和春正融 江山蕩漾朝曦紅

知韶老不分高下 花信一傳一戸開



浦波浦波ハタラシク候難岐ノ風ニシテ吹梅吹梅...

東都にて梅地をうらに采花給しと云へり...  
ちりる青葉吹風とさむく吹葉心吹入りや  
信はりしはるる由を御地はるるや...  
あろろふりぬは遊川回流りして流る信消と  
わが心はるる由を御地はるるや...

三月天衣のつれと人よも別れ...  
東都めく或人へりしは信自心乃...  
六君子湯

右加味 天門冬 麦門冬 五味子 熟地黄  
此四味は外箱根草信に加へて用ひいと物し

駿列巨鼈山清見真國禪寺

開山第一祖國聖禪師 聖國師 准用祖師賜宝珠

護國禪師中興勅賜自覺聖智禪師大揮暹和尙柱

是乃人無双の務地也客殿に鶴の繪有海門眼清く有渡

地濱三保地崎詠はれせぬ寺前紅梅今盛に栄く

一株に東西 十七間余北東

菴山銜翠玉梅蕊 一簇紅雲照海門

紫府清香暖風裏 枝南枝北別乾坤

清見く見世若此面れとて人の為さる梅地不々

辛酉二月廿二日乃口号中後に見出せし夜うに

記す

卯月朔日乃うらと

ついでせぬにまのまに春のよはれまのふれ名流をみふ

我張府のうらとときの子規鳴さうらうらうらうら

いしとそよふりてはあふりてはあふりてはあふりて

時鳥言侍は年ごへぬこーぬのふのこーひ行ま

孟夏初八佛誕之日浴五香火拾一年香一偈

七蓮隨歩 二竟洒湯

噴

淨法界身本無出沒

勿波滂波騰動三湘



家に不景 大織冠大明神以肖像ハ土佐光起ノ不

景也項日彼神君ヲ祀ム（法華經教行）以て

像（清印）一非一幸リ新に表背と解（大印大法）

謝（一）と云ハル（一）花と云ハル（一）借書し（一）す（一）

後（一）も（一）紫に（一）傳（一）く（一）る（一）用（一）心（一）に（一）く（一）る（一）由（一）

